

# 永平寺と琵琶湖周辺の史跡を訪ねる歌紀行（5）

長崎史談会名誉会長 宮川 雅一

午後6時近く永平寺に入山する。予定を少し遅れたので、研修道場・吉祥閣の大きな一室に荷物を置くとすぐ、廊下に整列して、寺内での作法などを聴いた後、それに従い声を立てないで2列に並んで食事をする部屋へ行く。

## 30、永平寺 食事・手洗い みな修行 静かに歩む 階段・廊下

もちろん精進料理で、般若湯なし。修行僧が細かく指導する作法と食べる順序に従って、まず自分に生命をくれる食材たちに感謝して合掌。その後静かに箸を運び、最後には食器を食膳の上にきれいに整理する。

## 31、精進の 膳に向かいて まず合掌 われの食する 生命すべてに

皿数は結構あるが、量が少なく、若い人には物足りないかもしれない。とにかくここでは食事も手洗いもみんな修行なのだから、ありがたい体験と思おう。しかし少し寒くもあるし、熱燗がほしいなー。

## 32、般若湯 ここでは法度と 知りながら いささか淋し 永平寺の夜

広間に戻って、三々五々、これまた次の行事に遅れないよう、急いで清潔な風呂に入る。吉祥閣5階の大広間でまず偉いお坊様の法話を聴き、次に坐禅をする。皓台寺などでも経験した円形の座布団を使うので足は痛くない。眠りそうになるのを堪えるのが辛かった。警策の音で助かる。思えば今日一日、西明寺、金剛輪寺、彦根城、関ヶ原、丸岡城、そして永平寺と、よくまあ、石段、階段を登ったり降りたりしたものだ。

## 33、階段を 無数に歩きし その報い 足はまずまず まぶたが重い



最後に、永平寺を修行僧の行動を中心にして紹介した映画を見る。以上の夕食以来の日程は、平成8年最初に永平寺に参詣したときと変わらない。一度決めた

ら変えないという宗祖道元以来の伝統をここでも垣間見た気がする。

## 34、道元の 教えを守り 永平寺 七百余年の法灯を継ぐ

午後9時消灯。16人の男が、修行僧がそうであるという畳一枚に一人の割合で、2列に重なり合うように敷かれた布団に潜り込む。両側のすぐ側に、隣の人頭がある状態。おそらく眠れなかった人がいたに違いないが、自分は疲れていたで、幸い両側2人等から鼾など聞こえないうちに眠ってしまった。

## 35、永平寺 睡眠までも 修行なり 九時の消灯 畳一枚

起床は、3時40分。ここでも急ぎ洗面・手洗いを済ませて、廊下に整列、まだ暗い中を、傘松閣にある貫主の公式応接の間である光明蔵へ入室し、南沢副貫主の法話を拝聴し、230枚の天井絵を拝観後、朝課が行わ



れる法堂へ進む。法要半ば、これを監院として主催される海雲山皓台寺住職大田大穰師が大きな体躯に微笑を湛えて登場される。懐かしい限りである。

## 36、大本山 朝の勤行 司り 海雲山主 現れ給う

この中央には、本尊「聖観世音菩薩」が祀られている。なかなか拝観することが難しい立派な仏像であるから、焼香するときに、上を見るように原田会長から注意を受けるが、焼香したら次の人のためにすぐ横に動くようにとの役僧の指示があったりして、よく見ることができなかった、残念。14年前この法堂で次の短歌を詠んだ。

## 37、それぞれに 異なる容貌(かお)の 修行僧 五百羅漢と なりて入堂

## 38、修証義を 合唱する声 澄みわたり 独唱するかと 聴く朝まだき

(次回に続く)